



岐阜って魅力ない？ 若者の人口流出、 岐阜大学の学生にホンネを聞いた

OKB総研 委嘱コンサルタント

河合 達郎 氏（一般社団法人 ^{やまなび}山学 代表理事）

座談会参加者のみなさん

岐阜大学生

※50音順
学年は座談会時
①所属学部
②出身



小川 凌平さん(4年)
①教育学部 ②岐阜県瑞穂市



加藤 凜花さん(3年)
①地域科学部 ②岐阜県中津川市



鈴木 已以南さん(3年)
①地域科学部 ②愛知県西尾市



中嶋 萌さん(3年)
①社会システム経営学環 ②岐阜県大垣市



新見 航海さん(3年)
①応用生物科学部 ②岐阜県岐阜市



西谷 颯太さん(3年)
①地域科学部 ②愛知県名古屋市



森本 圭祐さん(3年)
①教育学部 ②愛知県北名古屋市

岐阜大学担当教員



後藤 誠一さん
地域協学センター 助教、
ぎふ地域学校協働活動センター
センター員

地方の人口減少に歯止めがかからない。特に若年女性の流出が顕著。2024年度末に発表された岐阜県人口問題研究会の中間報告では、若年層、特に女性の県外への流出に対して強い危機感が示された。同年秋には、県内に在勤在学する10～20代女性の42%が、岐阜に「住みたくない」と答えたという同研究会のアンケート（調査期間 2024年7～9月）結果も公表された。

岐阜県って魅力のない地域ですか？そんな疑問を前回座談会^(注1)に参加してもらった岐阜大学の学生7人に聞いてみた。7人はいずれも、岐阜大学地域協学センター^(注2)が展開する実践的なプログラムで、地域の現場で活動する経験をしてきた学生たちだ。岐阜県の各地域に深く入り込んだ学生たちのホンネを語ってもらった。

「問題はある。でも、 あきらめない人がすごくいる」

——地域協学センターが開く実践的な授業を通し、岐阜県の魅力をどう感じましたか？

鈴木 岐阜大学に入るまではそもそも岐阜に来たことがあまりなく、愛知県民として「岐阜は何もない」って思っていました。授業を通して感じたのは、「思ったより岐阜にもいい場所あるじゃん!」ってことでした。一番印象に残ったのは、美濃加茂市のぎふ清流里山公園です。私がまだ小さいころに知っていたら、絶対に家族で遊びに行きたらうなって思いました。郡上市も郡上八幡の街並み以外にも行くと違う魅力があるなって発見がありました。

西谷 授業で行った八百津町では、外国人の方が地域を活性化させた

ということまで頑張っていたらしい。外国人の方が頑張ることで、その思いが地域の方々にも連鎖していくような雰囲気が感じられ、印象に残っています。

小川 僕は瑞穂市出身なのですが、県内の各地を見て回ることで逆に瑞穂市の魅力について気づきがありました。JRの駅があり名古屋まで電車で直通、大垣にも近い。県内でも人口がギリギリ増えている数少ない自治体なので、正直、小中学校では少子化も感じませんでした。瑞穂市を出て他の地域と比べてみることで、足元の地域の現状についても実感することができました。

森本 ビルメンテナンスの技研サービスさんなど、県内の企業を訪問して活動させていただきました。一番感じたのは、確かに岐阜はいろいろ問題を

抱えているかもしれないけど、それをあきらめない人がすごくいるんだと。岐阜がどうやったらもっとよくなるのか、どうすれば魅力をアピールできるのかといったことを、ものすごく真剣に考えている方がたくさんいらっちゃって、そこがいいなと思いました。

県内の社会人の方々と話をする中で、「人は結局、感情で動くんだよね」というある企業の社員さんの言葉が今も印象に残っています。理屈では分かっていても、そこに感情のベクトルが向かないと人々は動かない。どうしたら感情に働きかけることができるのか。新しい価値を作って、それをアピールしていくってところが、すごく大事なことだと学びました。

なのに、なぜ選ばれない？

——みなさんは岐阜の魅力を感じた一方で、岐阜を離れる若い人たちもたくさんいるという現状があります。なぜ若者に選ばれないのでしょうか？

加藤 名古屋には岐阜にないものがたくさんある。就活中にまわりの子で名古屋がいいって声はたくさん聞きます。逆に、岐阜を重視する子はあまりいないのですが、私は岐阜にこだわっています。私自身がまわりは自然に溢れる岐阜県東部で育ったというのがあるのかなと思いますが、名古屋

屋にないものが岐阜にはあると感じています。

新見 岐阜はあまり楽しくないから東京や大阪に行きたいという子が多いですね。僕は歴史や文化に興味があるので、東西の文化が交わる中心という意味で、岐阜にはすごく魅力を感じます。一概にみんなにとって楽しい地域というのは難しいのかなと思います。
鈴木 県外から来て感じるのは、交通の便が良くないと来たいとは思わないなど。私は車を持ってないので全部自転車か公共交通での移動なのですが、岐阜駅から岐阜大学までバスで30分もかかるので、友達も連れて行きにくい。交通の便が悪いと、誰かを招待しようと思っても気軽に呼べないなと感じます。就職にあたっても、交通アクセスの問題は関係があるのではないのでしょうか。

中嶋 特に女性の県外流出が多いという記事を見ましたが、女性が就きたいと思える人気の業種がなかなか岐阜県内にはないのかなと。名古屋とか都会の方がいろんな業種が幅広くあって、規模も大企業から中小企業までたくさんある。岐阜が好きかという問題とは別に、就職の選択肢と自分のやりたいことが合わないということなのだと思います。

自分のやりたいことを照らし合わせるときに、岐阜を離れる選択をするこ

とはやむを得ません。一方で、例えば岐阜県内で子育てしやすい環境を整えておくことで、子育てのタイミングになったときに戻ってきやすくするという方法もあるのかなと思います。

——後藤先生はどう感じますか？

後藤 岐阜に残りたいと思っても条件が合わなかったり、移動の問題があったりということを出ていく選択をせざるを得ないという人もいるでしょう。そういったところというと、暮らしやすさとか働きやすさみたいなものをもっと柔軟に整えていくというのも一つ方法としてあるのかなと。つまり、「この地域だったら働きやすい企業がたくさんあって、自分の生活に合った働き方ができる」といったニーズに沿うような環境整備をするとか。

若者の全てが都会志向ということではありません。自然が豊かなところがいいとか、田舎に住みたいとか、都会に疲れちゃったとか、地方に目が向いている若い方もいます。ウェルビーイングやワークライフバランスといったところにつながる環境を岐阜県の中でどうやって作っていいのか。そんな観点での取り組みが方法としてあるのではないのでしょうか。

「キラキラ感」とキャリア選択

総研 岐阜県内の企業と、名古屋・栄の高層ビルにある企業から内定をもらった学生さんが、「おしゃれな環境の中で仕事ができる」という理由で名古屋の企業を選んだという話を聞いたことがあります。仕事終わりでも遊びに行けるところがたくさんあるし、と。とてもリアルな意見だなと感じました。

岐阜県では若年層の人口流出が目立っている

年齢階級(歳)	男性			女性		
	転入	転出	転入－転出	転入	転出	転入－転出
15～19	1,750	1,899	▲149	1,597	1,547	50
20～24	7,395	7,652	▲257	6,492	7,091	▲599
25～29	8,236	8,749	▲513	7,222	7,702	▲480

出所:「令和6年岐阜県人口動態統計調査結果」(2025年3月21日公表)より
(*)転入・転出・転入－転出の単位は(人)

——こうした「キラキラ感」みたいなものは、キャリア選択をするうえで頭に入ってきますか？

加藤 入っていたことはありました。自分が仕事を選択するにあたって何を一番求めるかって考えたときに、私は生まれ育った岐阜に恩返しをしたっていう気持ちが強かったので、それが一番大事なと。キラキラは、それと比較したらそこまで重視するものではないって整理しました。

中嶋 私も加藤さんと同じでキラキラが頭の中を通ったんですけど…。全国飛び回ってとか、東京に本社があつてとか、名古屋で働いてとか、そういうキラキラに憧れていたときはありました。だけど本当に自分がやりたいことって何かなっていう軸で探し始めたときに、やっぱり地元で貢献できる仕事をしたっていうのがあって。知らない間に地元への愛着が、自分が思っている以上に大きくなっていったっていうのを感じました。

私は大垣しか住んだことがないからかもしれませんが、改めて自分が住みたい場所を考えたときに、いま自分がいるところの居心地がいいなと思ったんです。大学生活の中で友達と京都とかいろんなところに遊びに行きましたが、住むなら地元がいいなって。自分自身の好みや性格ともバランスが取れて、地元で働きたいっていうところに気持ちが落ち着きました。

鈴木 就活で大手も中小企業もいろいろ考えた中で、ネームバリューを意識しちゃう部分もありました。いろいろ考えたうえで、自分の中の重要な選択ポイントは、働く人と雰囲気です。ずっと地元の愛知県で働きたいなと

考えていたので、自分の住みたいところから通えたらいいと思っています。

後藤 私にもありましたね。全国各地を飛び回って、立派なビルの中で働いたらカッコいいとか。国家公務員になって霞が関で働いてみたいとか。そう思うこともあったんですけど、私、生まれ育ったところが山奥のいわゆる限界集落だったんです。もともと、自分が住んでいたときに集落は4、5軒。今は、うちを含めて2軒くらいになっています。やっぱりそこでは暮らせないから、子どもたちは出ていって、家だけが残っている。

そのような生活環境は、不便で大変でしたが、のびのびと暮らしやすく、小学校まで楽しく歩いて通ったという記憶が残っています。その記憶が今でも自分の心の中に宿っているなと感じています。自分の幸せをどこに置かで、働き方や住む場所は定まってくのかなと思います。

さらにいえば、年齢の重なりによってその幸せの置く位置も変わってくる可能性があるのではないのでしょうか。10代、20代であれば、もう全国どこに行ったらOK。だけど、年齢を重ねてくると、自分自身を取り巻く環境も考え方も変わってきます。そうしたときに、自然の中で暮らしたいと思う人たちの引き受け先として、地域の側がどれだけ準備ができているのかということも問われてくると思いました。

岐阜の魅力の広げ方 「まずは岐阜を知ってもらう」 「自分が楽しく住む」

——みなさんが岐阜に対して感じた魅力は、どうすればもっと若い人たちに

に広げられるでしょうか？

森本 まずは岐阜を知ってもらうことだと思います。「岐阜には仕事がないから」という人がまわりに多くいるのですが、岐阜県の有効求人倍率は全国平均より高くなっている。つまり企業が求人しても人が集まらない状況です。大学1年生のとき県内の塾でアルバイトをしていたのですが、塾の子に「どこで遊ぶの？」と聞いたら「名古屋」って答えるんです。いずれのできごと、岐阜県の良さがよく伝わっていないことからくるものではないかなと感じました。

私たちが受けた次世代地域リーダー育成プログラムを修了した岐阜大生の県内定着率は、岐阜大全体の平均に比べて高いという結果が出ています。地域について楽しみながら知る「エデュテインメント」というようなことが大事なのかなと思いました。

小川 僕は、何か外に向けて積極的にアピールするというよりは、まずは自分自身が岐阜で楽しく住むということが大事なのかなと思っています。県外で就職する同級生もいますが、岐阜で充実した暮らしを送っている人がいるということを、ふとしたときに気が付いてもらえれば、それがきっかけとして岐阜に移り住む選択肢が出てくることもあるのかなと。

新見 中学生、高校生のうちに地元企業のことを知る機会があるといいです。八百津町の内堀醸造さんのことを知ったのは大学3年の初めのころで、実習で関わるうちにおもしろそうな会社だなと興味がわきました。だけど、大学3年生にもなるとある程度進路も決まっちゃっている。今さら変えられないというところもあるので、大学進学や

就職を考える前の中学生、高校生の段階で、企業による出前講座といった企業を知る機会が増えるといっているのではないかと思います。

西谷 最近、体験格差という言葉が目立っていますが、自然体験はやっぱり地方の方がしやすい。名古屋で生まれ育った身からすると、自然体験の機会がなかなかないんですよね。自然がある岐阜だからこそできる体験というのも、アピールできるポイントなんだと思います。

〈座談会を終えて〉

選ばれない岐阜、そして「住みたくない」といわれる岐阜。そんなデータやアンケート結果とは対照的に、学生たちは岐阜で感じられる魅力をたくさん語ってくれた。

大きく二つのことを感じた。一つは、県内の地域に入れば入るほど、岐阜の魅力は見えてくるのではないかとということ。美濃加茂市の公園、郡上市の中心から離れた地域、八百津町のきらりと光る醸造会社。学生たちが挙げてくれた魅力は、全国の誰しもが知る超メジャーな存在ではないかもしれない。地域につぶさに入っていく機会を得た学生たちだからこそ、こうした魅力に気が付いたのだろう。

もう一つは、岐阜に魅力を感じているか否かということと、居住の地として岐阜を選ぶかどうかは別問題なのかもしれないということだ。岐阜を「選ばない」のではなく、利便性や職業といった条件面から「選ぶことができない」という状況が、学生たちの言葉からにじんでいた。私自身、過疎化が進む中山間地で暮らす身として、利便

性の高い地域へと吸い寄せられるような感覚は痛いほどわかる。

では、岐阜という地域にどんな打ち手があるのだろうか。ヒントもあったように思う。子育て世代や都会に疲れた人たちを包み込む環境を整えること。豊かな自然を生かし、昨今叫ばれる体験格差へのアプローチを強めること。また、企業ができる取り組みとして、社会人になる直前の大学生よりもっと前の、中学生や高校生に向けてアピールする機会を増やしてはどうかという声もあった。足元の採用にはつながらないかもしれないが、長い目で見て地域と自社のためになる取り組みだといえる。

今よりもっと多くの若者に選ばれる岐阜になる、そんな可能性を感じさせてくれる学生たちの声だった。

※発言者名は敬称略

※座談会は2025年2月17日(参加学生4人)、19日(同3人)の2日間にわたって開き、各回の回答を誌面上で再構成した。

(注1) 地域を興すvol.3「子どもと大学生がつながる、地域の居場所の未来」



(注2) 地域課題の解決に大学が持つ知見を活用しようとする文部科学省「地(知)の拠点整備事業(COC)」の枠組みで整備された岐阜大学の機関。産学連携のほか、学校を核とした地域づくりをめざす「地域学校協働活動」の県下における取り組みを支援している。7人の学生はいずれも、地域協学センターが展開する社会教育士(社会教育主事)養成課程と次世代地域リーダー育成プログラムを受講した。



一般社団法人 山学 代表理事 河合 達郎 氏

1987年5月3日 岐阜市生まれ
2006年3月 岐阜県立岐阜北高等学校 卒業
2010年3月 立命館大学国際関係学部 卒業

職歴

- 株式会社朝日新聞社(2010年4月～2021年3月)
- 岐阜県本巣市地域おこし協力隊(2021年4月～2024年3月)
- フリーライター、編集者(2021年4月～現在)
2024年3月より、朝日新聞岐阜県版でコラム「無人駅から」連載中。
- tete. (2023年5月～現在)
いちじくの栽培／加工／販売
- 一般社団法人 山学 代表理事(2024年3月～現在)
学習支援／地域食堂／自然体験
ローカル線・樽見鉄道の無人駅で開く学習支援の継続に向け法人化。本巣市内の30代3人で設立。中山間地の子どもに焦点を当てた活動を展開する。



山学レポート



いちじく農園「tete.」の
ホームページ



いちじく農園「tete.」の
Instagram